中岩円月の中国文学的背景

久須本文雄

中岩円月（一三〇〇―一三七五）は詩を能くしてその作詩の面に深く意を注ぎ、唐代詩壇の竜象たる李白（七〇一―七六二）・杜甫（七一二―七七〇）・白居易（七七二―八四六）、その他宋代の蘇東坡（一〇三六―一一〇一）・黄山谷（一〇四五―一一〇五）、遡って東晋の陶淵明（三六五―四二七）（後に譲る）等の詩を愛誦したことが窺われる。彼の李・杜・白についての詩を東海一漚集（巻一）に徴して見るに、擬古の詩に

吾愛李太白、騎鯨捉明月、世上不知仙、以為水中没、茫茫宇宙間、誰復比風骨、万里秋天高、独有稍空鶻。

とあり、贈張学士[1]の詩の中に

夢中得句参李杜、郊島瘦寒何足云、詩之於道為小技、試将大道俱相論。

とあり、偶看杜詩有感而作[2]の詩の中に

久廃成野趣、早涼読杜詩、男児功名遂。

とあり、三月旦聴童吟杜句有感の詩に

二月已破三月来、少陵人去没全才、春風不管風騒変、李白桃紅属別裁。

とあり、更に效老杜戯作俳偕体[3]の詩がある。文ではあるが、江湖勧請実翁住浄妙疏の中に

奚以苦吟、為問杜甫。（東海一漚集、巻二）

とある。白居易については

止止菴前来禽著花、花容頗似蕎蔔、而糅淡紅可愛也、效楽天体、作来禽、嘲蕎蔔。[4]

と題する七絶の詩（同上、巻一）がある。なお、彼は文明軒雑談（同上、巻三）に於いて、蘇東坡と黄山谷との詩を引載

し、蘇・黄の詩は頌であるか詩であるかについて次の如く評している。

東坡題楊次公薫詩云、薫本蘭之族、依然臭味同、曾為水仙佩、相識楚詞中、幻色雖非実、真香亦竟空、云何起微馥鼻観已先通、今時禅和子、以頌詩為分別、以細巧婀柔者、謂之為詩、以粗強直条之語名之為頌、且用仏祖言語乃為頌、如蘇黄二公詩、為頌耶亦為詩也、幻色非実、鼻観先通、固似頌也、黄亦有諸曰、山谷詩曰、海上有人逐鼻、天生鼻孔司南、但印香厳本寂、不必叢林徧参。

上掲に於ける彼の李・杜・白・蘇・黄・陶の詩に徴して、殊に李・杜の詩を深く愛読し、如何に李・杜を私淑し崇尚したるかが窺われると共に、その抱負の非凡なることが知られるであろう。

中岩の作詩を見るに、古詩に於いては、特に五言古詩に長じ、その作数に於いても、古詩四十三首の中、五言古詩が三十一首、七言古詩が十二首にして、五言古詩が遙かに多いことが知られる。彼は古詩に於いて専ら長篇大作に意を用い、五言古詩の和儀則堂韻謝珠荆山諸兄見留の百句及び答不聞の八十句の如きはその最たるものにして、次が五言古詩の和答東白の四十句、右地動驚而作之、其晩風起入夜、旋猛且雨、次日風転勁、勢不可止、又作云の三十八句、瘧疾の三十六句及び七言古詩の春雪の三十二句で、同じく七言古詩の謝惠青瓷香爐并序と送沢雲夢の二十二句の詩がその次に位するものである。古詩に於いて、最も短篇の作は古詩四十三首の中、僅か五言古詩の庚午三月東陽和尚書所見詩韻・題竹堂行巻・擬古及び七言古詩の兜率寺陋房、夜為大風雨所搖揺、睡醒而作の四詩（八句）で、他の三十九首はそれ以上のもので頗る長篇の力作が多数を占めている。これに依って如何に彼が特に古詩に於いてその長篇の作詩を好みそれを得意としたかが知られる。

彼の五言古詩は、李白の飄逸奔放、神識雄邁にして、塵俗を超脱した道家的風格を描写して余す所なきものというべきで、古体を得意とする所も類を同じくしている。五言古詩に於ける擬古三首・和祖東伝二首・贈珣白石古意は李白の風格をおび、七言古詩に於ける遊武夷山・寄東白・兜率寺陋房、夜為大風雨所搖搖、睡醒而作も、能くその趣を模しているといえる。七言古詩は他面に於いて、杜甫の雄峻沈鬱、悲涼憂痛にして、世俗的な儒家思想の色彩もおびている如くである。春雪及び兜率寺陋房、夜為大風雨、所搖搖、睡醒而作は、杜甫の暴風歌殊に柟樹為風雨所拔歌及び茅屋為秋風所破歌に比すべきであり、送沢雲夢は彼の遺風を伝えるものといえる。五言古詩ではあるが、答不聞及び和儀則堂韻謝珠荆山諸兄見留の長篇は、縦横排蕩の中に章法の整斉たるものがあるが、杜甫の北征と寄岳州賈司馬六丈・巴州厳八使君両閣老五十韻に拠るものともいえる。李白は超俗的にして豪放豁達、磊落不羈であり、杜甫は現世的にして温厚謹直であって、共に性格を異にし思想も相反していたのであるが、中岩は古詩に於いて李・杜の詩風を兼ねたるものというべきであり、両詩聖が六朝の弊風を一掃して、古文の復興に尽し、古体を重視したのと軌を一にするものといえる。

中岩は長篇の古詩に長じているが、然し近体の詩といえどもこれを能くし称すべきものがあり、その作数一七四首に達し、量に於いて古詩を凌駕していることが知られる。五言律詩は、その作僅かに十一首で、殊に歳晩と遊赤松宮の詩は、李白の仙風を彷彿せしめるものである。七言律詩は四十四首で、古詩と殆んど同数にして、殊に寄前大理藤納言・金陵懐古・和韻相城懐古は低徊悲傷の趣致があって、杜甫の真風を得たるものとすべきで、その金陵懐古は絶海中津(一三三六—一四〇五)の銭塘懐古に類し、送紹侍者之竜門も盛唐の風を擬するものといえる。

五言絶句はただ九日渡海作が一首、六言絶句は利根山行春の四首のみで、前者は李白の風をおびている如くである。同じく絶句ではあるが、七言絶句の一一一首に比し、五言絶句がただ一首に過ぎないのは、蓋し中岩が五絶の作詩を好まなかったため、意を茲に注がなかったことに依るものと思われる。古体・今体その作詩合して二一七首にして、七言絶句はその約そ半数を占めているのは、中岩が近体殊に七絶にも得意でそれを能くしたことによるものとすべきである。七言絶句に於いて、帰郷中留博多寄別源・厳島・亀山の詩は李白の趣があり、送東侍者之相城・和別源韻・鞆津の詩は杜甫の風をおび、檀浦の詩に於ける封侯能有幾人得、戦骨乾枯堆白沙の句は、晩唐の曹松(九〇一頃)の己亥歳(七絶)の詩に於ける憑君莫話封侯事、一将功成万骨枯の句を翻案したるものである。次に中岩の詩を古近両体に分けて、その作数を改めて茲に表示すれば次の如くである。

- 古体
  - 五言古詩……三一
  - 七言古詩……一二
  - 四三
- 近体
  - 律詩
    - 五言律詩　一四
    - 七言律詩　四四
    - 五八
  - 絶句
    - 五言絶句　一
    - 六言絶句　四
    - 一一六
    - 七言絶句　一一一
  - 一七四
- 二一七

中岩は古詩に長じ、特に五古が得意で、近体詩に於いても七律と七絶を能くし、五古は古体を得意とする李白を、

七古は李白及び杜甫を、七律は律詩を得意とする杜甫を、七絶は絶句に於いて唐代第一と称せられる杜白を、それぞれ模してその真風を得ているものというべきである。古体・近体を通じて彼の詩は、沈雄悲壮なる杜甫の詩風と飄逸高雅なる李白の詩風とを兼ね、ならびに杜甫の儒家思想的な面と李白その他、白居易・蘇軾などの道家思想的な面とをおびているといえる。五山詩僧の雄と称せられている絶海は、義堂周信（一三二五―一九八八）と同じく、概ね中晩唐を以て準としているのに対して、中岩は李・杜を学び盛唐を以て則となしている。茲を以て久保天随は日本儒学史に於いて

詩人としての位地をいへば殆んど絶海に凌駕す。（一二六頁）

と、中岩を評していることは宜なりというべきである。故に中岩の詩は絶海と比肩するというよりも、寧ろ彼より優位を占めているものというべきである。中岩の詩に微しても窺見せられるが如く、純然たる僧家の詩としてこれを認め難く、全く李・杜の如き在俗詩人の風格を具えている。この点について、北村沢吉「五山文学史稿」に於いて次の如く述べている。

其の比較的僧規を脱し、自由に世態人情に順応したるが為めなりと云ふべき也。即ち其の詩を取りて其の人の性格を見るべく、其時の思想をも窺ふべし。蓋し五山にありては以て唯一の世間的詩人と称せざるを得ざるなり。絶海の如き技能に至りては固より優れりと雖も、時代と接触したるもの幾許ぞや。予故に中岩を指して独り真詩人の風ありとなす。（二三九頁）

玉村竹二「五山文学」（日本歴史新書）第五章に於いて、五山文学の表現形式を宗旨表現手段・語録的性格・寺制

上実用・純然たる在俗文学の四種に分類しているが、中岩の詩・文は前三部類に入るものでなく、在俗文学の部類に属するものとすべきである。

中岩は文に於いても、詩と同じく則を唐にとり、六朝に於ける技巧を弄した華麗なる修辞主義の四六駢儷体の文を斥罷して、無技巧的・達意的にして規格の広大なる古文の復興に意を傾注した。五山に於ける古文は、虎関師錬（一二七八―一三四六）がその復興を唱え、中岩これを継ぎ、義堂に至って純粋なる古文の域に達したものというべきである。故に中岩の文は虎関と義堂との中間に位置づけられるものといえる。中岩は唐代に於ける二大文豪たる韓退之（七六八―八二四）・柳宗元（七七三―八一九）の散文を推称し、殊に韓愈を学ばんとした。建武中興に際し、国家の富強を計るために、弊風を一掃してその改革を述べた原民・原僧の二篇（東海一漚集、巻三）は、韓愈に於ける原道・原人の文体に拠って作ったことは論を俟たない所である。[7] 中岩の与虎関和尚（同上）の書は韓愈の与于襄陽書に、祭母代虔九峰（同上）は韓愈の祭十二郎文に拠っている如くである。この祭母を始めとして。祭幻住中絶際・祭竺僊和尚・祭義師立翁などの祭文は東海一漚集（巻三）及び余滴（上村観光、五山文集全集、第二輯）に三十三篇を挙げているが、祭文は彼の長とする所で、実に筆情懇切にして韓愈の及ばざる所である。茲に次の二篇だけ引載する。

祭幻住中絶際

歳在戊辰、焼燈之前、吾辞絶際、絶際慼然、送吾過橋、雪顧照川、臨別区区、不忍悁悁、日月蹉跎、于茲四年、重来長洲、水満春田、故径相移、新柳罩煙、入門問主、主已逝焉、恍爾升堂、哀章累篇、白骨粲粲、紅涙連連、金芽和露、嫩煑清泉、霊也昭兮、曷不享旃。

祭義師立翁

惟師、世家京師、皆栄寵侵、師当計偕、涿之緇服、東来海湄、肆道亀谷、於寂菴室、生処已熟、月也、夙以険釁、仍罹愍凶、生不踰月、父竄西邦、奕代之業、一旦掃空、母也不育、叔伯咸窮、殆死道路、独師厚憫、怵吾為命、既髫且亂、育我勗我、以解寒冱、百身贖恩、不可以尽、師帰甲山、謝事大慈、予時罹病、不得従之、爾来遵徳、伏臘八移、既受僧業、恨不依師、飛蓬無根、漂梗無迹、偶於福山、蔵拙自適、不料忽聞師已告寂、怳爾魂消、不任怵惕、無由奔喪、叫号千里、失辞招些、采蘩于沚、大円鏡中、曷殊返邇、惟師之霊、必来歆止。

更に七言律詩の答充太虚四首に於ける第一首起句の責己重周軽待人は、韓愈の原毀に於ける冒頭の

古之君子其責己也重以周、其待人也軽以約

に擬したことは明らかであり、同じく七律の和東白韻寄藤刑部二首に於ける第一首起句の盤谷泉甘可隠人は、送李愿帰盤谷序の

盤谷之間、泉甘而土肥、（中略）、隠者之所盤旋

によったものである。その他詳細に両者を対比すれば、中岩の文のみならず詩に於いても、韓愈のそれに拠っている所鮮少でないことが首肯せられる。

茲を以て中岩が韓愈から受けた文学的影響は多大であったといえる。我が国に於ける韓柳文の翻刻は、元人俞良甫が嘉慶元年（南朝元中四年、一三八七）に開版したのがその始をなすものであるが、それは中岩の寂（永和元年、一三

七五）後十二年なるを以て、彼が韓柳文開版の機運を醸成したるものというべきである。蓋し中岩が韓柳文を推称し、その開版を促がした功は、日本開版史のみならず、日本漢文学史に於いても特筆すべきものである。

韓・柳について述べたが、これに関連して陶淵明と蘇東坡について触れてみたい。中岩は、六朝の綺靡なる文風に染まず、当時独り超然として自然を愛し、田園詩人として自然復帰を唱えた陶淵明にも私淑したと思われる。彼が淵明の帰去来の辞を読むと題する、或者の詩篇を見て、感激して所懐を述べた五言古詩を作っている。

客有寄詩数篇、其首題曰、読淵明帰去来辞、余甚有所激、故書其後云

淵明達道者、真意豈於詩、詩尚非所於、其外竟奚為、帰去復何意、折腰誰弗辞、去就共不屑、不屑亦毋思、毋思猶渉思、是非総従之、悪詩辱淵明、淵明不攢眉。（東海一漚集、巻一）

これに依って、彼が淵明の帰去来辞を始めとして桃花源記等に於ける洒洒落落たる悠悠自適の心境にも、深く感得した所があったことは首肯せられる。詩（五古）ではあるが、彼の和祖東伝（二首、後掲）の前首に於ける

想立東籬下、三嚥采其花、悠然望無窮

の句は、淵明の飲酒（二十首）の詩に於ける

採菊東籬下、悠然見南山

の句を翻案したものであることは明らかである。宋の蘇兄弟については、中岩は軾也尨轍也善文（中正子、叙篇）と評し、殊に李白に似た飄逸奔放な東坡について、文明軒雑談に於いて東坡の詩（既掲）を引載して評しているが、文を得意とした東坡や淵明に対してもこれを私淑している。彼等のかかる風格をおびた詩文をも愛誦しその受けた感

化も鮮少ではない。

次に中岩の疏語であるが、彼はこれにも意を注ぎかつこれを能くした。疏の作数は、虎関（済北集）が五篇、絶海（蕉堅稿）が十三篇、雪村（語録）が三十二篇、義堂（空華集）が五十五篇であるが、中岩に於いては五十六篇の多きに及んでいることに徴しても窺見せられる。禅門の疏には山門・諸山・江湖・同門の四疏があるが、これらは古文体と異って律語・韻文の四六駢儷体をなしている。虎関の禅儀外文はその形態を備えたものであるが、中岩の疏は必ずしも仏禅的色調をおびているものではない。当時禅林に於いて、疏文を作る規範として元僧笑隠大訴の蒲室集（十五巻）が重用されたが、中岩もこれに拠ったことは論を俟たない。殊に東海一漚集、巻二に於ける次の疏の如きは蒲室集に依って得たるものといえる。

万寿請無碍疏二（後疏）

豊拠西海之東、朝暾夕霏景像可翫、師出前輩之後、光風霽月胸襟堪欽、人境相如、古今希遇、某人、鐘関東気、空冀北群、凌雲之材、久歎四十囲霜皮無用、談天之口、尽推三千銀河倒流。（以下省略）

建長請象外和尚疏

楼台得月、花木逢春、盍反樹立宏達之本、泉石含暉、麟竜呈瑞、将復故家全盛之風、惟大覚之嫡孫、宜巨福之盟主、某人、雅量納海、雄弁興雲、明大法出常情、円機活脱、闡洪猷尽幽致、風度爽清、且嫌枯木寒岩暖気全無、而況白雲流水沢施不溥、源脈分自松下、波浪漲於桃花。（以下省略）

蒲室集が中岩の詩文の上に与えた影響も多とすべきで、彼は延文三年（一三五八）五十九歳の時、この蒲室集に対し[10]註釈を施している。虎関の経註が古註を主としているに対して、中岩は新註を主としているを以て、彼の蒲室集の註も新註に依ったものと思われる。蒲室集の註は中岩を以て嚆矢とすべきで、それ以降に於いて、仲芳円伊（一三五四―一四一三）が蒲室疏解を作り、村菴霊彦（一四〇三―一四八八）が蒲室抄を作っている。玉村竹二「五山文学」（一〇〇頁以降）に於いて、絶海が世に所謂蒲室疏法を伝えて日本に於ける四六文作法を一変したとされているが、その先鞭をつけたのが中岩であって、彼が四六文の新[11]しい形態を伝えたことは重要な意義があるとしている。

中岩の上梁文は百丈法堂上梁文上有師表閣と吉祥寺新建方丈上梁文外門牌額曰不二境の二篇（東海一漚集、巻二）のみで、上掲の万寿請無碍疏及び建長請象外和尚疏の如く、佳句麗語多く六朝の文体を模してはいるが、然しそれは彼の本色とする所ではない。殊に彼の百丈法堂上梁文は、唐の百丈懐海（七二〇―八一四）の開創した百丈山大智寿聖禅寺の法堂及びその上層の天[12]下師表閣を建立するに及んで、彼中岩にその作成を命ぜられたものであるが、元人を凌いで異国の彼が作成に当ったことは、彼が如何に華語に通じその文才の卓絶していたかが知られる。

百丈法堂上梁文　上有師表閣

異則貌無則禽、一部清規三代礼楽、往者興来者継、百丈法席四海竜象、要看真正挙揚、更須斬新作略、上方主人、炳若之徳、丹青猶嫌久而有渝、温然之姿、玉璧全類廉而不劌、躬工人績、内謀外成、来董精藍之明年、屢営幹楨以愛日、撤去此堂弊、馴致其棟隆、層以飛閣流丹、冠于雄峰絶勝、結綺臨春逐壮麗、太形王屋輸巍峨、地属洪都、訪風恰同滕王之作、梯升雲漢望世界、豈待張騫之槎、手摘星辰、肩過日月、天下師表、十八

世而中興、上方霊蹤、五百載之余烈、当作師子吼於師子座上、宜脱野狐身於野狐窟中、爰挙脩梁輒唱短頌、
児郎偉抛梁東、迦葉峰高挿太空、雨霽煙消風景好、鳥輪発彩著円穹、児郎偉抛梁南、仙花蔟錦、水挼藍、渾
無俗駕到霊境、八面車輪鎖翠嵐、児郎偉抛梁西、雄嶺衝雲天宇低、暁起那伽乗月立、断腸霜猊一声啼、児郎
偉抛梁北、天柱高兮地勢極、倬彼昭回如可承、山河在掌、生顔色、児郎偉抛梁上、唐朝古刹人咸仰、梵音依
約白雲中、鬼護神呵来肸蠁、児郎偉抛梁下、風俗由来自爾雅、山冷桑麻長稍遅、水清花竹秀而野、上梁之後、
伏願宗猷与時偕行、綱要不墜、帝徳致遠能化、基業長存、五気相和、六民同利。

次に彼の説及び論であるが、東海一漚集にその作数を徴すると、説(巻二)は四十七篇にして、論(巻三)は僅か二篇のみに過ぎない。説の四十七篇中、殊に復初・剛中・天泉・温中・居潛・方中・道行・虚中・不疑の諸説は、主として易・中庸などの儒教思想を解明しているもので、全く儒家の経説と異なる所がない。中岩の儒学思想については、稿を改めるので茲では省略するが、各説に於ける儒家思想の一端を記しておく。居潛説に所謂躍于淵飛于天は、詩経(大雅、旱麓篇)の鳶飛戻天、魚躍于淵或は易経(乾卦)の或躍在淵(九四)、飛竜在天(九五)の句を模したものである。中庸(第十二章)にこの詩経の句を載せて、道の隠微にして普遍、その所を得て昭著なることを現わす費隠を説いている。なお居潛説の竜徳而隠者也は易、乾卦の文言伝の同句を引載している。次に温中説の怵惕惻隠之心は孟子(公孫丑、上)にあり、喜怒哀楽之機未発乎用也は中庸(第一章)の喜怒哀楽之未発謂之中によるものである。なお温中説には、易の繫辞上伝に所謂顕仁蔵用を引いて温中を説いている。説四十七篇中に於いて、特に儒教的色彩をおびている居潛説と温中説の二篇を茲に引載しておく。

居潛説

乾之姤其繇曰潛竜、竜徳而隠者也、隠也者居乎不見之地、凡徳而不居其位者有二、其一以不得時也、其一以謙之道也、謙者巽也、巽権也、由是言之、謙亦計時之可否者也、不知之者以巽牀為謙、非君子之道也、侍予者名曰謙、実称焉、予字之曰居潛、潛者必見、見者乾乾不息、而後躍于淵飛于天、与時偕進則可矣。

温中説

温之称者、怵惕惻隠之心、已著乎仁也、中之言者、喜怒哀楽之機未発乎用也、孔子曰、顕諸仁蔵諸用、説者曰、顕仁者用之形也、蔵用者仁之心也、是故温其形、而怵惕惻隠之心已著矣、中其心、而喜怒哀楽之機未発矣、形也者可見、故曰顕、心也者叵見、故曰蔵、雖然形之与心不可離也、然則温由中温、中由温中、惟温故富有焉、惟中故日新焉、富有之謂大業、日新之謂盛徳、所謂鼓万物而不与聖人同憂者、温中之謂歟、友人良上人求字、以温中命焉、又求説、上人有志易学、故喜而作之、上人者筑之筥崎人也、掌蔵于京之東福云。

論の二篇は道物論と鯤鵬論とであるが、極めて長篇で、これは儒教思想ではなく、専ら道教殊に荘子の思想について論じている。道物論は、物論を斉一して虚無の世界、すなわち道枢に至るべきとする斉物論（内篇、第二）の思想によって展開しており、なお応帝王篇（内篇、第三）に於ける至虚の境に心游する無名人と天根の会話の一節を引

載している。

天根遊於殷陽、至蓼水之上、適遭無名人而問焉曰、請問為天下、無名人曰、去、汝鄙人也、何問之不預也、予方将与造物者為人、厭則又乗莽眇之鳥、以出六極之外、而遊無何有之郷、以処壙埌之野。

鯤鵬論は荘子の逍遙游篇（内篇、第一）によったもので、無何有の境に優遊自適する鯤鵬について論じ、逍遙游篇の冒頭の次の文を引載している。

北冥有魚、其名為鯤、鯤之大不知其幾千里也、化而為鳥、其名為鵬、鵬之背不知其幾千里也。

説或は論ではないが、中岩の五言律詩の中に荘子について次の詩がある。

読在宥篇、摘取篇中語、以成五言八句、效一進一退体

堯桀治天下、恬愉不得皆、陰陽分喜怒、居黙見竜雷、僥倖較存喪、倉囊引跪斎、鴻蒙何等者、雀躍実奇哉。

（東海一瀛集、巻一）

これは荘子、外篇の在宥篇を精誦して篇中の諸語を摘記して作ったものである。彼が引いた諸語を在宥篇に徴して順次列挙してみよう。

昔堯之治天下也、（中略）、是不恬也、桀之治天下也、（中略）、是不愉也。

人大喜邪、毗於陽、大怒邪、毗於陰。

尸居而竜、淵黙而雷声。

幾何僥倖而不喪人之国乎、其存人之国也、無万分之一、而喪人之国也。

乃始臠卷愴囊而乱天下也。
乃斎戒以言之、跪坐以進之。
鴻蒙方将拊脾鵲躍而遊。

これによって、彼のこの五言律詩は、在宥篇の殆んど全般にわたっているといえる。道物・鯤鵬の両論及び五言律詩は、宛然荘子に接している如くである。中岩は老・列両子よりも荘子を私淑し、これを普く渉猟し深くその思想に精通していたのみならず、荘子の超脱的な文学的作品を心から愛好していた。

東海一溫集・別集・余滴に所収の詩文・雑著とその作数を列挙すれば次の如くである。

古詩　四三　上梁文　二
律体　五八　銘　二四
絶句　一一六　表　二
賛　七〇　書　八
疏　五六　記　四
説　四七　論　二
雑文　五　秉炬　七
祭文　三五　仏事　一〇
序　四　行状　一

跋　一　中正子　一〇
手簡　一　自歴譜　一
拈香　一八

以上は上村観光「五山文学全集」詩文部、第二輯の刊本に徴したのであるが、次のものは東京大学史料編纂所（内閣文庫）蔵の写本、東海一漚集所収のもので書名を挙げておく。

弁朱文公易伝重剛之説　一
藤陰瑣細集、上下　二
語録　二
日本史　（焼棄処分）
蒲室集註　（不伝）

中岩の作品は、古詩・律詩・絶句・賛・疏・銘・論・説・随筆から法語・偈頌に及んで、その分野が極めて広汎であって、殊に賦は我国に於ける大宗というべきである。彼の詩は李・杜の風を模して盛唐に則をとったのであるが、その文に於いては韓・柳を模して範を中唐に得たものである。彼は古文の大家である韓・柳や、そして彼が修也宗韓也（中正子、叙篇）と述べている如く、その後継者として古文の復興に尽した宋の欧陽修（一〇〇六―一〇七二）等と同じく、古文を唱えその復帰に意を注いたが、これは主として韓・柳・欧の影響によるものというべきである。彼の詩文には易・中庸及び杜・韓の儒教的な面が存しているのみならず、他面に於いて荘子及び李・蘇の如き道教

的な傾向をもおびているといえるであろう。とにかく中岩の詩文は、李・杜・韓・柳・欧その他、陶・白・蘇などを私淑崇尚し、彼ら巨匠の高雅な風を受容したことは、如何に抱負が非凡で造詣が深かったかが知られると共に彼に与えた文学的影響を看過することができない。東海一瀛集・別集・余滴、殊に彼が心血を傾注した珠玉の名篇である中正子十篇は儒学思想を解明したもので、彼に於ける卓絶した文才と博深な学識とを示すものというべきで、彼を以て五山文学否日本詩僧に於ける雄といえる。茲を以て師蛮（一六二六―一七一〇）は本朝高僧伝の賛に於いて

本朝緇林有二文章一以還、無二抗衡者一、可二謂二光前絶後一也。（巻三三、円月伝）

と絶称している所である。岡田正之「日本漢文学史」に於いて、中岩を虎関と雪村友梅（一二九〇―一三四六）に比して

三師の学徳は容易に軒輊すべからずといへども、単に漢文学の上より之を見れば、中岩は伯兄の地位を占め、虚関は仲にして、雪村は叔季たらざるを得ざるなり。（三二八頁）

と評しているが、中岩は日本漢文学史上首位にあるものとすべきである。五山文学に於いて中岩の詩は絶海に比肩し義堂に伯仲するというよりは、寧ろ優位にあるものと評すべきである。五山文学の双璧とされている義堂と絶海を世に二妙と称しているが、中岩の存在を看過しているものといえる。義堂をして文才たちしめたのは、その師中岩に他ならない。中岩の門から能文の義堂を輩出したことは、五山文学史上重要な意義をもつものである。中岩の骨力に於いては、到底義堂や絶海が企及し得ない所である。中正子は勿論、詩・文・説・論などに於いても、儒学殊に宋学の影響を多分に受けているもので、蓋し足利・徳川時代に於ける学風の源流をなしたものともいえる。中

岩の詩文その他の文学的作品は、極めて卓絶し中国文学の粋を集めたものというべきで、彼に及ぼした中国文学殊に唐代文学の影響は多大であったといえるであろう。彼の詩・文・説・論その他の著作には中国文学的背景が濃厚で、これを無視して彼の思想・文学を解することはできない。

(1)

贈張学士并序

予既遊盧阜、将過番易、買舟彭蠡、不可往也、信宿落星寺、観瀾張学士会茲、出吟稿示予、且談以太極無極之義、以及一貫不二之道、予亦以詩遺之

客邸細読観瀾文、風清四座収塵気、三復之後猶未厭、無那冬日将黄昏、夢中得句参李杜、郊島瘦寒何足云、詩之於道為小技、試将大道俱相論、究尽幽明帰無極、一貫儒仏空諸群、楊墨申韓寧復数、荘老虚玄猶弗援、天賜先生不失時、今上政是清明君、竚看場屋得意後、護法著論毋相護。（東海一温集、巻一）

中岩は正中二年（元、泰定二年）一三二五年入元して、帰朝する元弘二年（北朝、正慶元年、元、至順三年）一三三二年に至る間、学士張観瀾と会い、周濂渓（一〇一七―一〇七三）及び朱晦菴（一一三〇―一二〇〇）の太極説について論じ、更に儒仏不二説についても論及したのである。この詩に徴して、張学士が提示した吟稿については知ることができないが、中岩はこれを精読すること再三なるも未厭とあるから、いかに中岩の意に契合したかが窺われると共に、両者の詩の贈答や会談からしても親交の浅からざることが知られる。中岩は約そ八年の在元であるから、張学士は勿論それ以外の多くの碩学巨儒と交わって、儒学を論じその要諦を把握したであろうと思われる。

(2)

偶看杜詩有感而作

久廃成野趣、早凉読杜詩、男児功名遂、亦在老夫時、起予回百懶、庭樹稍秋颸、弥信古賢語、譬之病遇医、我本勇夫子、堕地爺横罹、祝髪学西仏、心空是立基、一得空心尽、万縁咸相随、繇茲偏縦性、天地誰願之、豁達存大度、局迹何其羈、是夏惜陰住、屋矮暑毒、突裸裎無礼法、聴渠癡児嗤、或面瓏禸子、叱弗問尊卑、狂名増遠扇、衆口金可鑠、

自今天化レ我、爽気多多来、斅学毋厭倦、式副初心期、進修求戮力、祖父遺清規。（東海一漚集、巻一）

(3) 效老杜一戯作俳偕体一

日本自無レ虎、夜半何有レ麌、触レ藩非羝羊、作レ怪応狐狸、煙荒雲冷処、天陰月黒時、隻履似レ催レ我、帰去未レ愆レ期。（同上）

(4) 止止菴前来禽著レ花、花容頻似薔薇、而粧淡紅可レ愛也、效楽天体、作来禽、嘲薔薇　一首

来禽花綻似薔薇、薔薇応無此淡紅、六出還君能学レ雪、不レ干桃李共春風。（同上）

(5) 杜少陵詩集には、自然現象についての悲歎憂痛な詩が極めて多いが、次のものは暴風歌として代表的名作である。

柟樹為風雨所レ抜歎

倚江柟樹草堂前、古老相伝二百年、誅レ茅卜レ居総為レ此、五月髣髴聞寒蟬、東南飄風動レ地至、江翻石走流雲気、幹排雷雨猶力争、根断泉源豈天意、滄波老樹性所レ愛、浦上童童一青蓋、野客頻留懼雪霜、行人不レ過聴竽籟、虎倒龍顛委榛棘、淚痕血点垂胸臆、我有新詩何処吟、草堂自此無顔色。

茅屋為秋風所レ破歌

八月秋高風怒号、巻我屋上三重茅、茅飛渡レ江灑江郊、高者挂罥長林梢、下者飄転沈塘坳、南村群童欺我老無レ力、忍能対面為盗賊、公然抱レ茅入レ竹去、脣焦口燥呼不レ得、帰来倚レ杖自嘆息、俄頃風定雲墨色、秋天漠漠向昏黒、布衾多年冷似レ鉄、嬌児悪臥踏裏裂、牀頭屋漏無乾処、雨脚如レ麻未断絶、自経喪乱少睡眠、長夜沾湿何由徹、安得広厦千万間、大庇天下寒士俱歓顔、風雨不レ動安如レ山、嗚呼何時眼前突兀見此屋、吾廬独破受凍死亦足。

(6) 銭塘懐古次韻

天目山崩炎運徂、東南王気委平蕪、鼓鼙声震三州地、歌舞香消十里湖、古殿重尋芳草合、諸陵何在断雲孤、百年江左風流尽、小海空環旧版図。

興亡一夢歳云徂、葵麦春風久就蕪、父老何心悲往事、英雄有レ恨満平湖、朱崖未洗三軍血、瀛国空帰六尺孤、天地百年同戯劇、燕人又献督亢図。（絶海、蕉堅稿、七言律詩）

絶海中津は臨済宗に属し蕉堅道人と号した。十三歳にして夢窓国師に侍し、十八歳にして建仁寺に赴き龍山徳見に参究す

ること十二年。応安元年（一三六八）入明して諸家を歴訪し、殊に太祖はその声誉を聴き召見して法要を諮詢し恩寵を受けた。天授二年（一三七六）帰朝。同六年慧林寺に開法し、のち天龍・等持に歴住し、応永十二年（一四〇五）四月示寂。年七十。特に詩を能くし著作に絶海録・蕉堅稿がある。

(7) 原人・原道・原性・原鬼・原毀を五原と称している。原とは文体の名で元始に遡って本原を推論するものである。原人以外は長篇であるから稍短篇の原人のみ茲に引載しておく。

形於上者謂之天、形於下者謂之地、命於其両間者謂之人、形於上、日月星辰皆天也、形於下、草木山川皆地也、命於其両間、夷狄禽獸皆人也、曰然則吾謂禽獸人可乎、曰非也、指山而問焉曰、山乎、曰山可也、山有草木禽獸、皆挙之矣、指山之一草、而問焉曰、山乎、曰山則不可、故天道乱、而日月星辰不得其行、地道乱、而草木山川不得其平、人道乱、而夷狄禽獸不得其情、天者日月星辰之主也、地者草木山川之主也、人者夷狄禽獸之主也、主而暴之、不得其為主之道矣、是故聖人一視而同仁、篤近而挙遠。

(8) 答充太虚

責己重周軽待人、寧将土苴忽其身、蠲除雑毒瀛中海、清浄根塵教外春、児女学粧時様嫺、丈夫更化古風淳、自従離索同門闊、独喜吾児謦欬頻。

(9) 和東白韻寄藤刑部

盤谷泉甘可隠人、龍蛇久蟄以存身、已応東面風吹凍、相次南枝花発春、衆醉難容屈原醒、道濶惟見孟軻淳、往来満屋賢豪裡、莫鳥丁丁啄木頻。

(10) 中岩の自歴譜（東海一漚集、巻五）の延文三年条に秋冬註釈蒲室集とあるが、本朝高僧伝及び延宝伝燈録には記載されていない。彼の蒲室集註釈は散佚して現在伝わっていない。

(11) 単対句と隔対句との配列に定型を作ったもので、その単対とは相続く二句が相互に対偶となるもので、隔対とは四句を以て一対とし第一句は第三句と対偶し第二句は第四句と対偶するものである。

(12) 百丈山の法堂及び天下師表閣を建立したのは、禅林清規の嚆矢とされている唐の百丈懐海の撰した百丈清規（二巻、百丈

古清規)を、至元二年(一三三六)勅命に依って再興するため、諸清規を集成して東陽徳輝に勅修百丈清規(四巻)を編せしめて百丈の遺徳とその功績を伝えるためである。この勅修百丈清規は勅修清規とも或は至元清規とも称されている。

(13) 顕仁蔵用とは、自然界に於ける易の道は万物を生成化育させる所の仁として顕現しているが、その作用は形迹なく全く不可見なものとするのである。中岩は顕仁を以て温とし用の形とし、蔵用を以て中とし仁の心とするもので、その形と心とは不可離的関係にして、形は可見なものであるが心は不可見なものとしている。この易と仁との関係も天人両道の相即不離観を述べたもので、彼の易学に対する造詣の一端が知られる。　(昭四三、九、五、稿)